事業名：「ことばの教育」パイロット校事業

学校名：広島県立広島中学校

所在地：東広島市高屋町中島31−7

ＨＰ：　http://www.hcyuko.hiroshima-c.ed.jp/

学級数：１２学級　４８０名（H18.11現在）

１　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

①　研究テーマ

論理的な思考力・表現力を育成するカリキュラム開発
−選択教科「ことば」の教材開発と評価方法の工夫−

②　研究のねらい

ア　主題設定の理由

県立広島中学校・広島高等学校では，教育目標の一つに「グローバル化時代に活躍できる人材の育成」をあげている。様々な価値観や文化の中で，自分の考えを明確に持ち，それを相手に正しく効果的に伝える力の育成に向けて，中高の６年間で論理的な思考力・表現力を身に付けさせていく必要がある。

中学校では，併設型中高一貫教育校に係る教育課程の基準の特例を活用した選択教科として，その他特に必要な教科「ことば」を設定するとともに，高等学校１・２年次では国語科の学校設定科目「実践現代文」を開設，３年次での総合的な学習の時間で卒業研究を実施するなど，６年間を通して，計画的・継続的に論理的な思考力・表現力の育成を図るためのカリキュラムを作成している。本研究は，そのカリキュラムの開発に係るものである。

〈本校における「論理的な思考力・表現力」の定義〉

○　事象を多面的・多角的に考察し，その特徴を明らかにするとともに，その事象と他の事象との関連を見出し，その事象の持つ意義を明らかにすることができる力。（個の内面において働く力）

○　論理的な思考を通して明らかになったことがらを説明するにあたり，まず全体構成を明らかにした上で，相手にとって分かりやすい言葉を用いながら，自分の意図することをより効果的に相手に伝えることができる力。（他者とのかかわりにおいて働く力）

イ　生徒の状況及び課題

本校の生徒は，文章を書いたり発表したりするという点については苦手意識を持っている割合は低い。しかしながら，入学者選抜における適性検査において，次の点に課題があることが分かった。

評　価　項　目	通常知識以上の思考である者の割合
相手の論の根拠をとらえて反対意見を主張する力	１１％
データを読み取り，分析し，解決策を表現していく力	３４％

（対象：本校入学者160名 入学者選抜適性検査 平成16年１月実施）

また，意識の面でも論理的に考えたり発表したりすることについて苦手意識を持っている割合は高い。

質　問　項　目	４　月
物事を筋道立てて考えたり話したりすることができる	３２．５％
根拠に基づいて自分の考えを話すことができる	４０．０％
自分の考えを順序立てて表現することができる	３７．５％

（対象：第１学年160名　意識調査 平成17年４月実施）

この意識調査は，入学当初の授業において課題に対し多面的に考え，それを相手に伝えるという学習活動を行った後に調査したものである。学習活動は活発に行われていたが，その中で生徒は論理的に考えることの難しさを感じている。

以上の２点からも，本校で育成すべき論理的な思考力・表現力の育成は重要な課題である。

（２）研究組織・体制

教務部カリキュラムマネジメント班を中心とし，選択Ⅰ「ことば」担当班，「論理的な思考力・表現力」理論研究班により実践・理論研究を進めている。

（３）研究内容

〈実施教科・学年〉選択Ⅰその他特に必要な教科「ことば」

第１，２，３学年　年間授業時数　３５単位時間

a　基礎・基本としての「言語技術」の導入

論理的な思考力・表現力の育成に当たり，その基礎・基本として「言語技術」をとらえ，「言語技術」を繰り返しトレーニングすることによって，相手に分かりやすく伝える技術や分析の視点，議論の力等に応用していくこととした。その「言語技術」には，次のようなものがある。

○対話と議論のための基礎技術……「問答ゲーム」等
○作文技術　・説明…描写，説明，報告，記録等
　　・論証…絵の分析，論証文，意見文等

これらを，「ことば」の授業の中でトレーニングする時間を設け，課題を用いて応用させていくように工夫した。

b　国語科と他教科によるＴ・Ｔ

すべての教科の核として考えるという観点から，国語科と他教科の複数の教員とがＴ・Ｔを組んで指導に当たることとする。そこでの国語科の教員の役割は，主に取り上げる素材を活用しての話合いや討論の指導，そしてそれを表現に結びつけていく指導である。

一方，他教科の教員の役割は，主に素材の選定や発想の転換，思考のポイントなどを示していく指導であり，そうした視点からの発問や説明内容を考える。例えば，社会の教員との授業では，次のような役割分担を行っている。

i　分析の対象資料（グラフ等）を選定する。〈社会科〉
ii　資料を生徒に示し，課題を設定する。〈社会科〉
iii　分析の視点を提示し，集団討論を組織・運営する。〈国語科〉
iv　分析・考察内容を発表する。〈国語科〉
v　分析・考察内容に対する評価を行い，資料の解説を行う。〈社会科〉
vi　資料をどのように分析・考察するかのポイントを押さえる。〈国語科・社会科〉

２　授業改善の視点

○　中高６年間の発達段階に応じた素材・学習活動の工夫

指導に当たっては，中高６年間を「基礎充実期（中１・中２）」「探求期（中３・高１）」「発展期（高２・高３）」と設定し，その期ごとに「指導上のキーワード」を設定する。これは，「発想の転換」「置き換えやモデル化」「自己の生き方との関連」を論理的な思考力を育成するために必要な中心的要素とし，それらを各期に位置付け，段階的な育成を図ろうとするものである。

＜指導上のキーワードの定義＞

基礎充実期（中１・中２）	発想の転換	事象を別の角度・立場・スケール等，今までの自分のスタイルとは異なる視点で考察すること。
探求期（中３・高１）	置き換えやモデル化	事象を別の事例に置き換えてとらえたり，象徴的なことばでとらえたりすること。

発展期 (高2・高3)	自己の生き方との関連	事象と自分とのかかわりや自分の立場を明らかにすること。

具体的な授業構想に際しては，「指導上のキーワード」を念頭に置いて，多様な素材や学習活動を工夫していくことになる。ここでの「多様な」とは，文章の素材が多様な分野にわたるというだけでなく，視覚的な素材・教材や聴覚的な素材・教材を見つけたり，話し合ったり，討論，発表等の表現活動を通して発想の転換を図ったりする等の学習活動をも視野に入れるということを示している。

3 研究の成果と課題等

(1) 成果

ア 論理的な思考力・表現力の育成過程を踏まえたカリキュラムの開発とそれに基づく授業実践により，「ことば」の授業は，学習者の「論理的な思考力・表現力」を高めている。

次の表のデータは，広島県教育委員会が６月に中学校第２学年を対象に全県的に実施した「基礎・基本」定着状況調査における「生活などに関する調査」の一部である。

領域	内容	肯定的回答の割合	
		本校平均	県平均
論理的思考力	物事を解決したり決めたりするとき，なぜそうなるのか理由を考えることができます。	77.2%	60.8%
	見たことや考えたことを，順序よく伝えることができます。	68.8%	49.8%

(対象：第２学年生徒154名　平成18年６月13日実施)

上記の「生活などに関する調査」のデータを見ると，「論理的思考力」の領域における２つの項目における肯定的回答の割合は，いずれも広島県の平均を大きく上回っていることが分かる。このことからも，生徒は，論理的に考えることや表現することに対し，力がついていると実感しているということが言える。

イ 「ことば」の授業で，国語科と他教科とのＴ・Ｔを行うことにより，必修教科に関する興味・関心が高まった。

国語科と他教科の横断的な内容を，「言語技術」を意識しながら分析したり，議論したりする学習を行う中で，必修教科に対し興味・関心が高まっている。

例えば，理科の内容を用いた「写真の分析」の単元では，「科学に興味がわいた」「身に付いたのは，物事をよく観察することだ」「前よりもっと理科が好きになって，もっといろんなことを知りたい」などの感想が多く見られた。また，社会科のグラフを用いた「データ解釈」の単元では，「身近なグラフでも社会の変化や歴史と関係していることが分かり，興味を持てた」「グラフを読み取っていくと，社会科の内容に関係していたのでおもしろくなった」などの感想が多く見られた。これは，取り上げた内容が議論などで深まることにより興味・関心が高まったと考えられる。

(2) 課題

ア 「論理的な思考力・表現力」に係る生徒の学力の変容をより具体的に見取っていくための評価方法を検討する必要がある。

イ 長期的な視点で，「論理的な思考力・表現力」を育成していくために，３年間（６年間）の系統的な指導計画の検証と改善・充実を図っていく必要がある。

(3) 今後の改善方策等

ア 中高一貫教育校６年間の系統的カリキュラムの完成

イ 論理的な思考力・表現力を高める教材の開発

4 実践事例

その１

(1) 学年と教科等名　第３学年　選択教科「ことば」

(2) 単元の紹介

①単元名　「パネルディスカッション」

②単元の目標

「社会科の課題を多面的・多角的に考察し，その共通点と相違点を特徴を明らかにし，論理的に考え，討論する」能力の開発

③単元の展開（指導計画）

	学習内容
1	「もし～ならば，ＡとＢのどちらを選ぶか」（「問答ゲーム」）を行い，討論の「言語技術」を確認する。
2	論題「天下統一ＭＶＰを決めるとしたら，織田信長，豊臣秀吉，徳川家康の誰を選ぶか」について立場を決め，社会科歴史の資料等から情報を収集し，立論を行う。
3	パネリストを中心にパネルディスカッションを行い，立論発表，質疑応答，意見交流を行う。
4	論題についての深まりについて社会科教師より，討論の在り方については国語科教師の評価を受け，自己評価を行う。

(3) 授業改善のポイント

①「問答ゲーム」などの「言語技術」の応用を図り，かみ合った討論の場を作っている。

②国語科と社会科の合科的・横断的な学習内容となっている。

③指導上のキーワードを念頭に置いた既習内容のモデル化を図っている。

(4) 授業の様子

パネリストを中心に，フロアからも論拠の明確な意見が発表され，質疑応答など討論の場面では資料に基づいてかみ合った議論が展開され，社会科の内容についての理解が深まっていた。

(5) 成果と課題

①成果

・全ての生徒が内容の深まりを感じており，社会科における関心・意欲・態度が高まった。

・「言語技術」を自然に活用しながら討論していた。

②課題

・様々な教科の内容を用いたパネルディスカッションの機会を設けるとともに，必修教科の授業の中での活用について検討していく必要がある。

その２

(1) 学年と教科等名　第１学年　選択教科「ことば」

(2) 単元の紹介

①単元名　「ザ・サイエンス～写真の分析～」

②単元の目標

「電子顕微鏡で撮影した写真を多面的・多角的に論理的に分析・考察する」能力の開発

③単元の展開（指導計画）

	学習内容
1	「分析の視点」を確認する。
2	写真の情報を分析し，特徴をつかむ。
3	理科の教師よりヒントを受け取り，写真の情報と併せてグループで議論し，推論する。
4	生徒の推論の深まりについて理科教師より評価を受け，自己評価を行う。

(3) 授業改善のポイント

①「絵の分析」技術の応用を図っている。

②国語科と理科の合科的・横断的な学習内容となっている。